（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	井上　拓也
論文題目	生態学的実在論に基づく意味論に関する研究—理論的考察と実践的言語記述—		

（論文内容の要旨）

本論文は、認知言語学の記述的手法を用いつつ、生態心理学の観点を取り入れた生態学的実在論を基盤とした意味論である「生態学的意味論」を構築することを目的とした、理論的・実践的研究である。本論文は全9章で構成されており、前半の第5章までは生態学的意味論をめぐる理論的議論、後半の第6章から第8章までは事例研究となっている。

第1章では、認知科学の潮流を概観し、認知科学の一分野としての認知言語学が本来的に有する脳・身体から環境への志向性を明らかにし、言語学に生態心理学的観点を導入するという「生態学的転回」の必然性について述べている。その上で、生態学的実在論に立脚した「生態学的意味論」を構築する必要性について論じている。

第2章では、生態学的アプローチの導入と課題の検討を行っている。知覚に関する認知的アプローチと生態学的アプローチを比較しつつ、生態心理学の知覚理論やエコロジカルな情報、アフォーダンス理論、生態学的実在論について説明している。さらに生態心理学における先行研究での「言語」の位置づけをまとめ、その課題を検討している。

第3章では、生態心理学の主要概念であるアフォーダンスを取り上げ、アフォーダンスの無限性、脱場面性、ヴァーチャル性・リアル性という側面を確認している。さらに、アフォーダンスの現勢化と知覚化という概念を新たに導入し、それらから構成されるデザイン過程を提示している。

第4章では、言語がデザイン過程においてシグニファイアの役割を担うと位置づけ、生態学的な言語コミュニケーションモデルを提示している。言語の創造性の問題について生態学的実在論の立場から回答することで、抽象的で脱場面的な言語の意味もこのモデルで扱えることを示している。

第5章では、本論文の提案する生態学的意味論の理論的枠組みを提示し、言語の意味を「言語化対象の提供するアフォーダンス（群）」として定義づけている。さらに、アフォーダンスの観点から言語表現の意味的容認性について説明すると同時に、シグニファイアの観点からアスペクトやヴォイスなどといった文法項目も説明できることを示している。これらを認知言語学の参照点構造やフレーム意味論を応用して記述することを提案し、ワードクラウドを用いた名詞の生態学的意味の可視化の方法論を提示している。

第6章は、日本語の場所表現に関する事例研究である。「Xに行く」といった場所表現のXに現れる名詞句の持つ知覚化構造について、生態学的観点から分析を行うことで、

相対名詞、指示詞、所属形・所有形が用いられる場所表現および相対名詞が使われる時間表現の容認性に参照点構造が関与することを示している。さらに、場所の提供する知覚や行為の経験・可能性、すなわちアフォーダンスを参照点とする経験参照枠を用いることで、場所名詞単体のシグニファイア構造を説明している。

第7章では、アイヌ語の場所表現に関する文法的制約を生態学的意味論に基づいて分析している。アイヌ語の場所表現は、指示詞や所属・所有形を用いる場合や場所名詞を用いる場合があるが、従来のような場所性に基づく説明に当てはまらない特徴が見られる。本章では、日本語の場所表現と同様、参照点構造や空間参照枠などの記述的道具立てを用いた言語分析を行うことで一貫性のある説明を提供している。相対名詞を用いて因果関係を表す構文や時間的順序関係を表す表現も、場所表現と同じく参照点構造により説明できることを示している。

第8章では、場所表現の範疇に含まれるアイヌ語地名の意味構造を分析している。アイヌ語地名の意味構造を認知言語学的な手法を用いて分析した上で、生態学的観点からの再考を行っている。アイヌ語地名は単なる空間的広がりを指示する名称ではなく、その場のアフォーダンスを参照点として当該の場所をターゲットとする参照点構造をシグニファイア構造として有するという分析が可能であることを示している。

第9章では、全体のまとめを行うとともに、本論文の理論的意義と実践的な貢献、さらに今後の課題と展望について述べている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、ギブソンらにより提唱された生態心理学を基盤とした新たな言語理論の構築を試みる研究である。申請者は認知言語学の枠組みでの研究を行う一方で、人間の認知機能に重点を置く認知言語学の現状を抜本的に見直す必要性を主張し、環境の側から人間の言語の営みを再規定することを提案している。認知言語学においても、言語使用者の置かれた状況や環境を考慮し、アフォーダンスの概念によって特定の言語表現の分析を行う研究はこれまでに散見されるものの、本論文のように生態心理学を全面的に援用した言語理論研究は画期的である。また、生態心理学においても人間の言語活動に関する研究は限定的であり、本論文で提示した言語のモデルが生態心理学へ与える学術的なインパクトも少なからず期待される。このように、本論文は理論言語学においてきわめて独創的な取り組みであり、高く評価することができる。

さらに記述的側面においても、本論文は価値ある貢献をなしている。第6章以降の事例研究では、生態学的意味論の観点から、日本語およびアイヌ語の「場所」に関連する言語表現の分析を行っている。ここで対象とされる「場所」は、環境の側に存在するアフォーダンス群を言語の意味とみなす生態学的意味論のアプローチの有効性がもっとも発揮される対象である。本論文は、認知言語学での参照点構造を援用し、ターゲットの知覚を誘導するシグニファイア構造によって場所表現の説明を行っている。本論文は、「病院に行く」という表現が病院のアフォーダンス（典型的には、診察を受けること）を参照点とし、病院という場所をターゲットとして指示すると分析するが、「私たちが昨日ごはんを食べたところに車を停める」のように経験を参照点とし、特定の場所をターゲットとして指示する「経験参照枠」が存在するという興味深い提案を行っている。さらに申請者はアイヌ語の知識を活用し、日本語とアイヌ語で場所表現の振る舞いが異なることを述べ、従来の「場所性」という概念だけでは分析が困難であることを指摘するとともに、社会文化的な環境がもたらす意味の重要性を示唆している。アイヌ語地名に関しては、例えば「富良野」は「huranu-i（匂いがするもの）」に由来し、その土地の水が硫黄を含み飲用に適さないことを標示する。このように、土地の利用価値（すなわちアフォーダンス）を参照点とし、当該の場所を表す事例が豊富に見られることを述べ、生態学的意味論の有用性を示している。

以上のように、本論文は理論と記述の両面において貢献をなすものであるが、一方で本論文の提案する理論が独創的であるゆえの問題点も指摘される。第一に、本論文における認知言語学の位置づけと生態学的意味論との整合性が挙げられる。認知言語学での参照点構造は基本的に知覚主体の側のモデル化であり、知覚者が参照点を恣意的に選び出すことも可能である。本論文の観点では、参照点構造が知覚者ではなく環

境の側に存在することになるが、これが理論的矛盾を生じないか十分に検討する必要がある。この点は、アフォーダンスが知覚者・行為者からどの程度独立して存在するかにも関係しており、生態心理学でも見解が様々であるため、今後議論を深めていくことが求められる。さらに、本論文では主に認知文法の言語観が引用されているが、認知意味論では身体性基盤からの拡張として分散認知も射程に入りつつあり、本論文の方向性と合致する動向として参照されたいところである。また、本論文で示された生態学的意味論の枠組みによる事例研究は場所表現に限定されているが、非空間的意味を表す言語表現に対してこのモデルがどのように適用されるか、具体的な分析対象を拡張することで記述的妥当性を示す必要がある。このような課題は残されているが、これらは申請者の研究の進展によって対処されることが十分に期待されるものである。

以上のように、本論文の提案する新しい意味論は言語理論の発展に寄与するものである。加えて本論文が提示する、人間と環境に根ざした言語観は、言語復興や地域防災といった社会貢献の側面も見込まれる。本論文はまさに「人間・環境学」の一部門であり、認知科学や文化人類学、人文地理学といった諸分野を結びつける学際領域への発展が見込まれる、価値ある研究であると言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年12月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降